

紗綾形文様について
大谷女子短大襦服 橋本千栄子

目的 合理主義社会において、過去のものを否定しようとする傾向が著しいなかにも、古い伝統が息づき、時にはこれが表面に表われ、超近代的な形と成りつつある種の流行を生み出す事もしばしばある。このような現象の根拠を検討するために、最も身近な服飾文様の分野において、何等かの宗教的意義を蔵していると考えられる紗綾形文様について検討しようとした。

方法 近世の一部のものをのぞいて、実物による考察が困難であるため、諸文献を中心としてその史的な立場から考察を加えた。

結果 紗綾の考察・紗綾形文様の発生と万字文様との関係・原始文様と地紋に關しては既に本学紀要16号に発表した。従って今回は織と染とその文様の展開について述べて見たい。

古代から近世に至るまでの織染の推移は、各時代の服装形態及び社会組織が大いなる影響を与えていると考えられる。その様な中で伝統的な文様は、生活が変り、時代が変ることによつていろいろと消長の過程を径てきた。しかしその時代の要求に適した様式となつて伝承されていることが明らかである。中国よりの舶載当初はシンメトリ形式、充填構成によつて始まつた紗綾形文様も、やがて同化して国民性を充分に發揮し、空間を文様構成の中に取り入れるまで發展した。これは、移り行く時代の波に同化した結果より生まれたものと推察される。しかし、当初の充填構成を主としたものが地紋として現在においてもその命脈を保つて發展している。